

寺院の瓦から城郭の瓦へ

— 中近世瓦研究の現状と課題 —

木戸雅寿

I. はじめに	(4) 家紋瓦
II. 寺院の瓦から城郭の瓦へ	(5) 滴水瓦
(1) 中世寺院の瓦研究	IV. 城郭の瓦から町屋の瓦へ
(2) 城郭で出土する寺院系の瓦	(1) 赤瓦
III. 織豊系城郭の瓦と築城政策	(2) 棧瓦
(1) 織豊系城郭の瓦	(3) 地方窯の出現
(2) 金箔瓦	V. 中近世瓦研究の今後の課題
(3) 桐紋・菊紋瓦	VI. おわりに

I. はじめに

仏教伝来と共に我国に伝来した瓦の製作技術のおかげで我々は今でも建物に瓦を葺き雨露をしのぐ事が出来る。これら祖先の英知の恩恵に預かっているが、我々は瓦自身がたどってきた永い歴史を余り理解していないように思われる。

これまで、考古学では瓦の研究と云えば奈良・平安時代がその主流を占めていた。論理的にはこれらの技術が中世を経て近世、現代へと受け継がれていくことがわかっているが、考古学的研究による実証は余りなされていない事がほんとうのところであろう。それは研究の対象物が建築の分野に長い間委ねられてきたことや我々研究者自身が重たくかさばるやっかいものとしてあつがってきた結果であることはまったく反省すべき点であった。

しかしながら、ここ数年、城郭の考古学的研究という新たな分野で一躍瓦研究が脚光を浴びている。特にその契機となったのは中井均氏による論考「織豊期城郭の特質について—石垣・瓦・礎石建物¹⁾—」である。ここでは織豊期の信長や秀吉の築城政策の基本的な歴史像と進むべき研究の方向が指針として示されている。その後、『織豊期城郭研究会』の設立と共にこれらの基礎的研究が進められている。そして、いまや個々の例証が追いつかないくらいの勢いで、研究の核心である瓦生産の形態はもとよりその社会的背景にも一気

に迫るものがある。

本稿はこれら近年に明らかにされた中世末から近世初頭にかけての瓦生産とその社会背景を最新の研究成果を基に整理して今後の問題点を提起するものである。

II. 寺院の瓦から城郭の瓦へ

(1) 中世寺院の瓦研究

仏教伝来以来、瓦生産は奈良時代から室町時代を通して、瓦葺きの建物は一部の官衙と公的な寺院（一部氏寺もある）の建築物に限られ寺院と直結するものであった。これらのうち、奈良時代の瓦については奈良国立文化財研究所が中心になり平城宮跡の瓦の型式分類を行った²⁾。また、佐原眞氏は製作技法の研究を行われた³⁾。近年では山崎信二氏が平城宮・京と地方寺院との同范関係から工人集団と技法の研究を行われている⁴⁾。さらに氏は「大和における平安時代の瓦生産」にも言及された。また、同じく、上原真人氏は古代末から平安時代の瓦の変遷、生産体制からその特質について研究されている⁵⁾。地方ではこれらの動向を受けて播磨、丹波、讃岐、尾張、伊予、信濃、上総、陸奥、近江等の国々から研究が報告されている。また、『中世土器研究会』による土器研究の分野からは丹治康明氏により神出・魚住窯を中心に生産面から研究されている⁶⁾。このように、奈良時代、平安時代については出土する遺物が圧倒的に多いため、考古学的研究が多い。これに反し、中世期の考古学的瓦研究はその資料の多くが建築学の手委ねられており、建造物に現存していることも相まって立ち遅れていた。そのようななか、天沼俊一氏⁷⁾、黒田昇義氏⁸⁾や梅原末治氏⁹⁾による「瓦工橘氏」に関する報告には先見性があった。報告の時点では銘文報告としての意識しかないが、その後、この問題については高橋美久二氏¹⁰⁾や今里幾治氏¹¹⁾により、地方での工人の在り方として研究され、近年では佐川正敏氏¹²⁾がその総まとめとして本家本元である法隆寺の瓦の調査から南都における橘氏の活躍を論じられている。これよりもはやく中世寺院の瓦としての本格的な研究がなされたものとしては元興寺の瓦調査¹³⁾が挙げられるであろう。ここでは瓦当の紋様変遷、技術的変遷、法量という考古学的手法で元興寺の瓦を分類され相対的に編年されたが、その高い見識が全国的に理解されることはなかった。

また、近年では、市本芳三氏による中世瓦の様相を出土遺物から地域の瓦生産を論じようとする意欲的な研究も認められ、今後の展開について期待されるものもある。

以上のような、緩やかな中世寺院の瓦の研究の歩は次の研究段階ともいえる城郭の瓦研究に潜在的な影響を与えた。

(2) 城郭で出土する寺院系の瓦（戦国期第Ⅰ段階＝城郭に瓦が導入される段階）

城郭の瓦は、これまで多くの人々が極く自然な歴史的推移として寺院の屋根瓦を単純に

城郭の屋根瓦へと応用したものと理解していたのでは無いであろうか。しかしながら、現在の研究ではこれらの考え方を根底から覆すような結果となっている。この問題にいち早くふれられたものに田中幸夫氏の一連の研究¹⁵⁾がある。工人集団のとらえかたの問題（姫路系工人か＝英賀系工人か）や瓦その物のとらえかたが多分に建築学的であるという欠点があるが、工人を中心とした観点から城郭の瓦を寺院の瓦との関係で解きあかそうとする考え方は評価できるものがあった。

実質的にこの問題は次の織豊系城郭の瓦の分類と変遷から整理されるべき問題であることは後に理解される。

まず、木戸はこの問題点について、工人集団の掌握は『信長記』等にみられるように「奈良衆」を掌握した織田信長が安土城から始めたことであるとし、織豊系城郭瓦を城郭への瓦導入第Ⅱ段階とし第Ⅰ段階は織豊期以前に城郭に瓦が導入されている城郭もしくは反信長勢力下の城で織豊系城郭以外の城郭で瓦が導入されている城郭を対象とした¹⁶⁾。そして、これは建物ごと、もしくは瓦を城郭に導入出来る中世以来の環境にある地域と城主の権力がある城郭に限られると考えた。つまり、信長以前もしくは織豊期の早い段階の城郭や反信長系城郭で瓦が出土する城郭で寺院系紋様を持つ瓦が出土する場合は、近くの寺から瓦を建物ごと調達するような、いわゆる転用や購入として考えられ、近隣の寺院との関係で瓦の相関関係は理解できるものである。よって、これらは決して織豊系城郭の瓦と認識できるものではない。

近年、「織豊期・織豊系」という言葉が研究の代名詞になりつつあるが、用語の混同が認められる。瓦が出土するとすべて織豊系城郭と認識して仕舞いがちであるが、瓦も縦割なもの考え方ではなく、その存在する地域的な条件と個々の瓦の存在の仕方と個別の理解の積み重ねによって整理されるべきである。

いずれにしても、城郭の瓦の導入には深く寺院の瓦が関わっている事は間違いがない。今後の地域での詳細な検討がさらに必要となり理解を深める結果となるところである。

III. 織豊系城郭の瓦と築城政策

(1) 織豊系城郭の瓦（戦国時代第Ⅱ段階＝織豊系城郭瓦が導入される段階）

織豊期城郭の瓦の考古学的な研究の先鞭は1984年の森田克行氏の高槻城の発掘調査にある¹⁷⁾。氏は出土した瓦の製作技法の差異から粘土板の引き方の違いを「コビキA」と「コビキB」のふたつの手法に分類され、AからBへの転換を畿内では大坂城築城の天正11年とされた。この先見性のある論については長い間評価されなかったが、現在もっとも端的に織豊期城郭の瓦を認識する指標として評価されている。

この方法を中心に1989年には久保智康氏が小丸城出土瓦の分類や文献から、瓦生産の画期が織豊期にあり織田信長により城郭の瓦生産が開始された¹⁸⁾と論じられた。



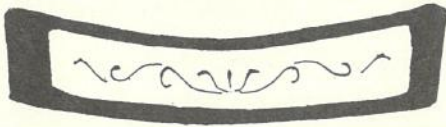




また、同年に土山公仁氏は信長の居城としてはじめて文献に登場する岐阜城出土の瓦を分類されて¹⁹⁾、岐阜城から信長は瓦を導入したとした。引き続き土山氏はこの説を補強する形で同範瓦あるいは同型瓦を中心として信長系城郭における瓦の採用について予察し、瓦工集団の織豊期における動きを整理した¹⁹⁾。しかし、久保氏による「岐阜城の信長居館とされる通称千畳敷の調査では、天正期以降の遺物がきわめて少ないにもかかわらず、出土する瓦類にはコビキBのものが相当含まれている。ただし、この事実評価の際には、美濃大窯編年各期の歴年代観が大きくかかわってくる。」というように岐阜城の瓦の問題については、遺物の検証の必要性が指摘されたが、後に、加藤理文氏と木戸¹⁶⁾が安土城の瓦と瓦当紋様の型式変遷の比較から岐阜城に遡るものはないこと、出土している瓦の紋様型式と他の城の瓦との比較から岐阜城の瓦は信忠もしくは信雄や池田以降のもの²⁰⁾と指摘した。このことは、後に織豊期・織豊系城郭を考える意味に於いて重要な位置を占める事になり、信長と秀吉の築城政策の問題に大きな波紋をなげかけることになった。いずれにしても土山氏の研究の方法論についてはその後の研究の道を示したとして評価できる。

さて、これらの研究を受けて、1990年には織豊系城郭の特質として中井氏が礎石建物・石垣・瓦をあげ、研究の方向性を提示している¹⁾。その後、1993年に加藤氏によってこの方向性は一足飛びに織豊政権下での築城政策を論じられるまでになった。氏は東海地方で出土する織豊系城郭の屋根瓦を体系的に検討し城郭の瓦導入に政治性が読み取れるとしている。これらの問題を再検討し織豊期城郭を意義を全国規模で検討するため、同年に織豊期城郭研究会が設立され、第1回研究集会で「織豊期城郭の瓦²¹⁾」、翌年の第2回研究集会で「同範・同紋・同系—織豊期城郭瓦工人の系譜を探る—」と題し、さまざまな地域や角度から報告研究がなされた。その結果については論集として発刊されている。また、基本資料として『織豊期城郭の瓦²²⁾』の集成も発刊されている。特にこの一連の動きの中で、安土城の瓦を木戸¹⁶⁾が、聚楽第瓦を森島康雄氏²³⁾が、大坂城の瓦を黒田慶一氏²⁴⁾が発表し、はじめて織豊期織豊系城郭の基本をなす資料が出そろった。木戸はここで城郭瓦として工人を統括して新たな瓦当モチーフ用いて政策的に瓦生産を行ったのは信長であり、その始まりが安土城にあることを提示した。近年、さらにこれを「城郭への瓦導入第II段階」とし、今回「戦国時代第II段階=織豊系城郭瓦が導入される段階」とした。このうち信長期を前期(天正4年から天正10年)、秀吉期を後期(天正11年~慶長5年)と位置づけた。さらに秀吉期を天正期(天正11年~天正19年)と文禄慶長期の二段階にわけた事とした。

以上のように現在、織豊期の織豊政権下の瓦は単なる建物の屋根瓦としてではなく、信長や秀吉が覇権争いを行う中で必然的に生み出された築城政策の産物として理解されてい

る。つまり、信長期では血族、親族に重要拠点城郭の築城をまかせ、その証として金箔瓦や織豊系紋様の瓦の使用を許している。このことはまさに政治的な工人の掌握を示している。信長がこれのできたのはひとえに畿内の制圧と当時優秀な工人を抱えていた南都寺院の掌握にはかならなかった。まさに安土城が築城を開始された天正4年という年は、南都の諸寺院が信長に降りた頃でもある。城郭への瓦の導入は畿内や南都の攻略なしにはなし得なかったのである。

また後に、これら信長の政策は秀吉にまるごと受け継がれている。秀吉はこの政策をさらに押し進めるために、金箔瓦や織豊系紋様の瓦を使い分国政策を実現するための人材登

分類記号	形式名	基準モチーフ
RNH I KBNH I BNH I	中心飾3葉 2転唐草	
RNH II 1 KBNH II 1 BNH II 1	中心飾3葉 2転飛唐草	
RNH II 2 KBNH II 2 BNH II 2	中心飾3葉 2転飛唐草	
KRNH III RNH III KBNH III BNH III	中心飾5葉 2転飛唐草	
RNH IV KBNH IV BNH IV	中心飾5葉 2転唐草	
BNH V	中心飾3葉 2転飛唐草	
KBNH VI BNH VI	中心飾3葉 2転唐草	

第1図 安土城出土軒平瓦織豊系瓦の瓦当モチーフ（註16a）

用とともに築城政策を押し進めている。これらの論証については加藤氏がすでに実証済みである。²⁰⁾これによると根本的な信長と秀吉の政策の違いは秀吉は有能な家臣を次々と登用している事であった。徳川家康を封じ込めるため防波堤の意味で東山道や東海道に新たに築かれた城には次々と築城にたけた近江の武将を配し、そこには金箔瓦や織豊系の瓦を用いた。これはまさに文献史学研究で検討されている秀吉の分国政策とも合致するものである。これらの研究は今後、中国地方、山陰地方、四国地方、北部九州地方の分国政策を立証していくひとつの手段ともなっていくであろう。なお、秀吉の政策では城主の国替えが非常に激しく、丹念にこれをおっていくと興味ある事実が浮かぶ。当初に配された城主は築城にたけた人物であるが、その後の城主は城下町や城経営にたけた人物のようである。これらの政策は家康の段階になると秀吉個人の力で全てを動かしていくのではなくシステムとして完成するようであり、それに従い、瓦や石垣のような媒体としての「もの」は不必要となり衰退していくものと考えられる。

このような、瓦を中心として織豊政権下での築城政策が検討されているなか、そのもっとも顕著な具体例として、最新の研究は進んでいる。次ではそれら具体的な個別事象からの研究成果を見てみたい。

(2) 金箔瓦

金箔瓦については、早い段階から中村博司氏により二度にわたりその集成が発表されている。²⁵⁾氏はその中で金箔の施されている部位に着目し、信長期のものを「凹面金箔」、秀吉期のものを「凸面金箔」と分類され画期を提示されたことは研究の大きな進展であった。その後、加藤氏は織豊政権下での築城政策に瓦が深く関わっている事を示した。²⁰⁾なかでも金箔瓦が大きな位置を占めている事をはじめ論じられた。氏はさらに金箔瓦が江戸の徳川家封じ込めのために築いた城郭に集中して使用されているところから「金箔瓦家康包囲網」なる論を展開し、近年では天皇の権威を最大限利用した豊臣政権下の象徴としての金箔瓦の意義付けが行われている。このように単なる光り輝く瓦や秀吉の黄金趣味といった発想から解き放たれた金箔瓦論は一気に政治史論に波及する問題を喚起した。そして、これらの論の展開は次の桐紋・菊紋瓦論を派生させ、さらにその論が補強される結果となっている。

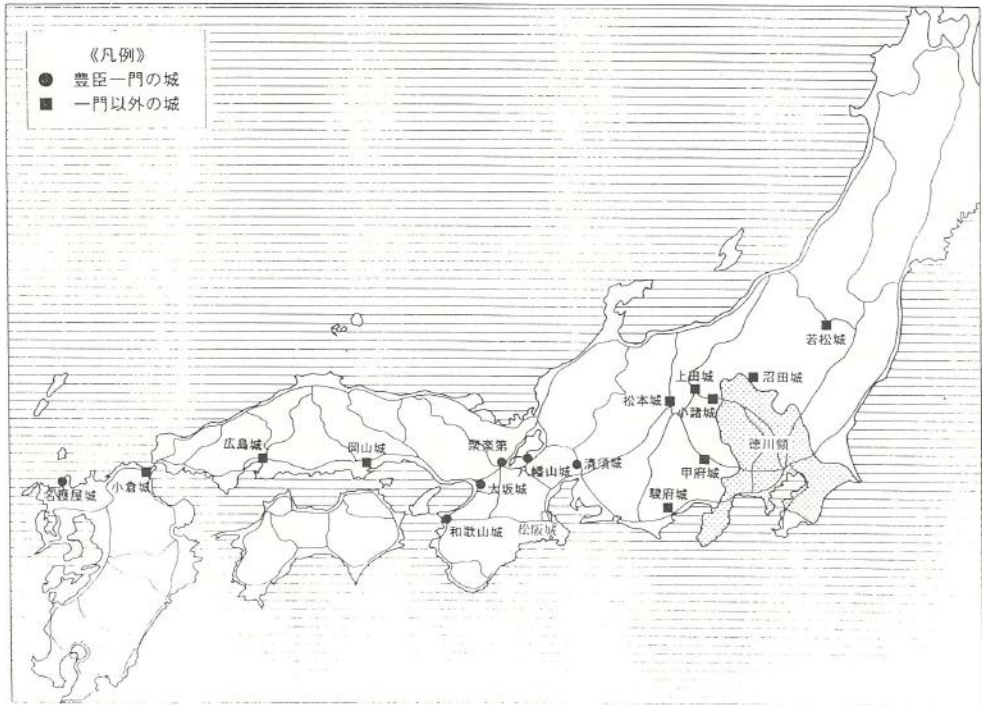
現在、金箔瓦の出土は北は会津若松城²⁶⁾から南は肥前名護屋城まで27件を数える。個別報告も信濃地方²⁷⁾の城や甲府城、岡山城²⁸⁾など年々その報告例は増えきている。今後、集成等の必要性和共に科学的分析の必要性も考えられるであろう。

(3) 桐紋・菊紋瓦

安土城からはじまった織豊系城郭の瓦のうち、唯一家紋として認定できるものに桐紋と菊紋がある。元来、これらは天皇家や朝廷の紋所であり、かつてな使用は許されていない。

	城郭名	出土及び採取瓦						金箔瓦 使用年代	築城者	備 考
		軒丸	軒平	家紋	鬼	鯨	飾り			
1	安土城	○	○		○	○	○	天正4年～	織田信長	家臣の屋敷の主要部も
2	岐阜城	○					○	天正5年～	織田信忠	従三位叙勲以後
3	松ヶ島城	○	○		○			天正7年～	織田信雄	安土主要部完成以後
4	神戸城						○	天正8年～	織田信孝	岐阜城改修完成以後
5	大坂城	○	○	○	○	○	○	天正11年～	羽柴秀吉	当初は、本丸周辺のみ
6	和歌山城	△	△					天正13年～	羽柴秀長	古記録に記載あり
7	八幡山城						○	天正13年～	羽柴秀次	麓の屋敷地から出土
8	清須城	○	○	○	○	○	○	天正14年～	織田信雄	家紋は鳥伏間、鬼板部
9	聚楽第	○	○	○	○	○	○	天正14年～	豊臣秀吉	家臣の屋敷地にも使用
10	清須城	○	○		○	○	○	天正18年～	豊臣秀次	
11	小倉城				○		○	天正18年～	毛利勝信	築城工事は天正15年～
12	広島城				○	○		天正18年～	毛利輝元	築城工事は天正17年～
13	岡山城	○	○		○		○	天正18年～	宇喜多秀家	桐紋軒丸瓦を使用
14	駿府城	○						天正18年～	中村一氏	大溝→水口岡山と同範
15	甲府城				○	○	○	天正18年～	加藤光泰	当初、豊臣秀勝の居城
16	松本城						○	天正18年～	石川数正	
17	小諸城	○	○					天正18年～	仙石秀久	桐紋軒丸瓦を使用
18	上田城				○	○	○	天正18年～	真田昌幸	鳥伏間も確認
19	沼田城						○	天正18年～	真田信幸	
20	若松城						○	天正19年～	蒲生氏郷	桐紋飾り瓦
21	名護屋城	○	○		○		○	文禄元年～	豊臣秀吉	天守周辺のみ
22	伏見城	○	○	○	○	○	○	文禄4年～	豊臣秀吉	家臣の屋敷地にも使用
23	駿府城	△	△	△	△	△	△	慶長12年～	徳川家康	『当代記』等に記載
別	二条城	○	○	○	○		○	永禄12年～	織田信長	聚楽第の屋敷地と誤認
別	松阪城	○	○		○			天正16年～	蒲生氏郷	松ヶ島城からの移築
別	彦根城	○				○	○	慶長8年～	井伊直勝	八幡山→大津から移築
別	名古屋城	○						慶長15年～	徳川義直	清須城から移築

第1表 全国金箔瓦出土城郭一覧表（註20c）



第2図 天正末～文禄初頭における金箔瓦城郭の分布図(註20c)

信長が使用できる理由は文献的にみても根拠のあるものである。また、秀吉が「太閤桐」という桐紋を使用している事も甚だ有名である。近年、城郭瓦の研究が進むに連れて、先の金箔瓦の分布以上にこれら桐紋・菊紋瓦の出土は、犬山城の報告を始め、多い事がわかってきた。現在、その出土は北は会津若松²⁶⁾から南は都城まで39件の事例が認められる。

これら桐紋・菊紋瓦の意義を検討するため、木戸¹⁶⁾と黒田氏²⁴⁾は奇しくも同じ年に出土例、紋様構成、城郭の意義、城主の意義など踏み込んだ論を展開し、信長が権威の象徴としてはじめた「桐紋瓦と菊紋瓦」を、秀吉がさらに権威付けを行い、「天下統一」を行うための官位叙任権の独占による家臣支配に利用したと意義づけた。織豊政権下では最低でも従五位下以上の官位でないと「桐紋・菊紋」の瓦を使用する事はできない。まさにこれら瓦は政治的な道具であった。

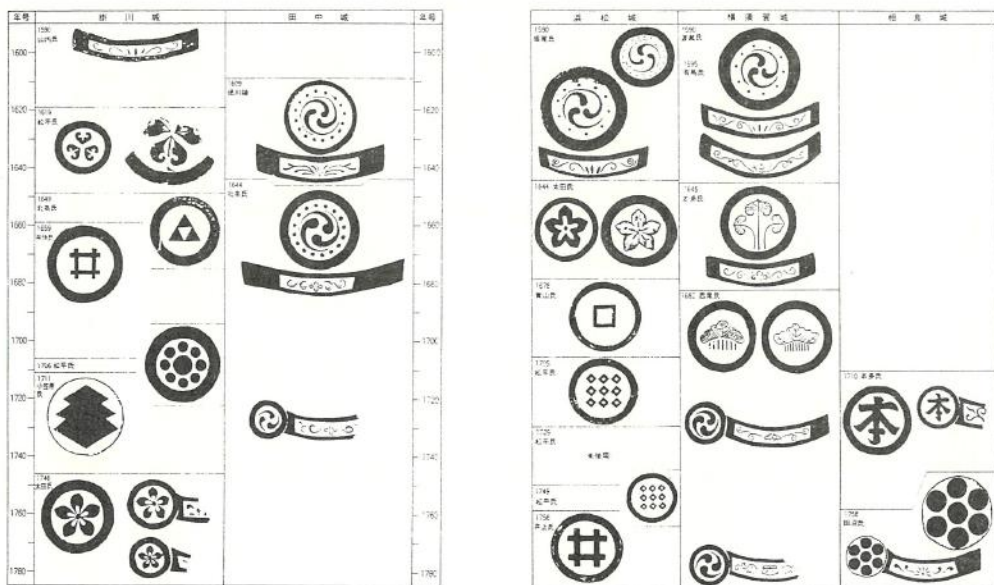
(4)家紋瓦

また、桐紋・菊紋の影響を強く受けて成立したと考えられるのが家紋瓦である。少なくとも織期には家紋瓦は認められない。これまで、二条第の「木瓜紋瓦」が安土城以前のものと考えられていたが、近年の検討の結果、出土位置、瓦の状況から聚楽第の武家屋敷のものと考えの方が妥当である。したがって、聚楽第、伏見城ころから家紋瓦は使用されたものと考えられる。なぜ、急速に家紋瓦が発達してきたのかという課題については家紋自

寺院の瓦から城郭の瓦へ（木戸）

	城名	所在	城主	年代	軒丸	軒	役瓦	軒丸	軒	瓦
1	会津若松城	福島県会津若松市	蒲生氏郷	天正18年～文禄4年		桐葉	五七			
2	沼田城	群馬県沼田市倉内	真田昌幸 信之	天正18年～文禄2年～慶長5年		桐葉		8複・9複		
3	甲府城	山梨県甲府市丸の内	豊臣秀勝 加藤光泰	天正18年～天正19年～文禄2年			五三・五七			
4	松本城	長野県松本市	石川数正 三好康長	天正18年～文禄2年～慶長17年	五七					
5	小諸城	長野県小諸市 小諸古城	仙石秀久 秀政	天正18年～慶長9年～元和8年	五三・三三	桐葉				
6	上田城	長野県上田市上田	真田昌幸 信幸	天正11年～慶長5年～元和8年			五七	8複・9複		
7	久野城	静岡県袋井市鷺巣	松下之綱	天正18年～慶長5年			不明			
8	岐阜城	岐阜県岐阜市 金華山	池田輝政	天正13年～天正19年				16複		
9	清洲城	愛知県西春日井郡 清洲	織田信雄	天正10年～天正18年		桐葉	五七			16複
10	犬山城	愛知県犬山市	土方惟利 三好常閑	天正12年～天正18年～慶長4年	五三		五三	13単	16単	
11	松ヶ島・松阪城	三重県松阪市 松ヶ島	織田信雄 蒲生氏郷	天正8年～天正12年～天正16年		桐葉				16複
12	安土城	滋賀県安土 能登川町	織田信長	天正4年～天正7年～天正10年			五五	12複		12複
13	近江八幡城	滋賀県近江八幡市 鷺翼	豊臣秀次	天正13年～天正18年	五三					
14	聚楽第・周辺	京都府京都市 上京区	羽柴秀吉 秀頼	天正14年～天正19年～文禄4年	五七・五三 五三	桐葉	桐葉・五五 六六・五七	7単・8複		
15	伏見城・周辺	京都府京都市 伏見区桃山	豊臣秀吉	文禄3年～慶長3年～慶長4年	不明・五七 五七			8複 10単・10複		
16	大阪城・周辺	大阪府大阪市	豊臣秀吉 豊臣秀頼	天正11年～慶長4年～元和1年	五七	五三	五七	8単・8複・12複 16複・6複・10複	10単	
17	姫路城	兵庫県姫路市 本町68	木下家定 池田輝政	天正13年～慶長5年～元和3年	七三					
18	明石城	兵庫県明石市 大明石町	小笠原忠真	慶長5年～元和3年	五七・五三			16複		
19	竹田城	兵庫県朝来郡 和田山町	桑山重晴 赤松広秀	天正10年～天正13年～慶長5年				12複		
20	由良成山城	兵庫県洲本市 由良町	池田輝政 池田忠雄	慶長18年～	五七		五三・五七			
21	大和郡山城	奈良県郡山市 城内町	豊臣秀長 増田長盛	天正13年～文禄4年～		桐葉				
22	鳥取城	鳥取県鳥取市	宮部継潤 池田長吉	天正8年～慶長5年～		桐葉				
23	鹿野城	鳥取県気高郡 鹿野町	亀井茲矩	天正8年～慶長14年		桐葉		12単		
24	米子城	鳥取県米子市湊山	吉川広家 中村一忠	天正19年～慶長5年～		桐葉		8単		
25	松江城	島根県松江市 殿町城山	梶尾吉晴	慶長12年～慶長17年		桐葉				
26	岡山城	岡山県岡山市 丸の内	宇喜多秀家 小早川	天正18年～慶長5年～慶長7年	五七・五三 六五	桐葉	不明	不明		
27	金山城	岡山県御津町金山	浮田春家	～慶長5年		桐葉		8単		
28	広島城	広島県広島市 基木町	毛利輝元	天正17年～慶長5年		桐葉				
29	高松城	香川県高松市	生駒親正	天正16年～慶長8年		桐葉				
30	福岡城	福岡県福岡市 中央区	黒田長政	慶長5年～元和9年		桐葉				
31	名島城	福岡県福岡市 東名島	小早川隆景 秀秋	天正16年～慶長12年				8複		
32	鷹取山城	福岡県直方市 大字頼野	毛利鎮実 筑紫・母里	～天正14年～慶長6年		桐葉				
33	岩石城	福岡県田川郡 添田町	熊井 毛利高頼	天正11年～天正15年～		桐葉				
34	豊前松山城	福岡県京都郡 苅田町	黒田孝高	天正15年～		桐葉				
35	名護屋城	佐賀県東松浦 鎮西町	豊臣秀吉	天正18年～慶長3年	不明		五三			
36	安岐城	大分県投獄東部 安岐町	熊谷直陳	文禄3年～慶長5年		桐葉				
37	金石城	長崎県下県郡 殿原町	豊臣秀吉 宗義 義智	天正19年～文禄3年		三三				
38	都城	長崎県都市	伊集院忠 忠真	天正15年～文禄4年～慶長4年	五七					
39	唐沢山城	群馬県佐野市 富士町	佐野房綱 信吉	天正18年～文禄元年～慶長7年	五七					

第2表 桐紋・菊紋瓦出土一覧表（註16c）



第3図 「静岡県における家紋瓦の成立」(註20d)

身の出現と意義に深く関わっているものと考えられるが、現在のところ研究があまりなされていない。唯一、家紋瓦の研究としては加藤氏の論考²⁰⁾があるだけである。氏はこのなかで、畿内畿内での家紋瓦の出現は天正14年(1586)築城の聚楽第家臣団屋敷であるとし、一般的に普及するのは慶長元年(1596)築城の伏見城家臣団屋敷、静岡県内では出土しているものの状況から幕府政治が安定化へ向け動きだしたところの正保~慶安(1644~51)と述べられている。これらの考え方は今後の研究の指針となるものであろう。

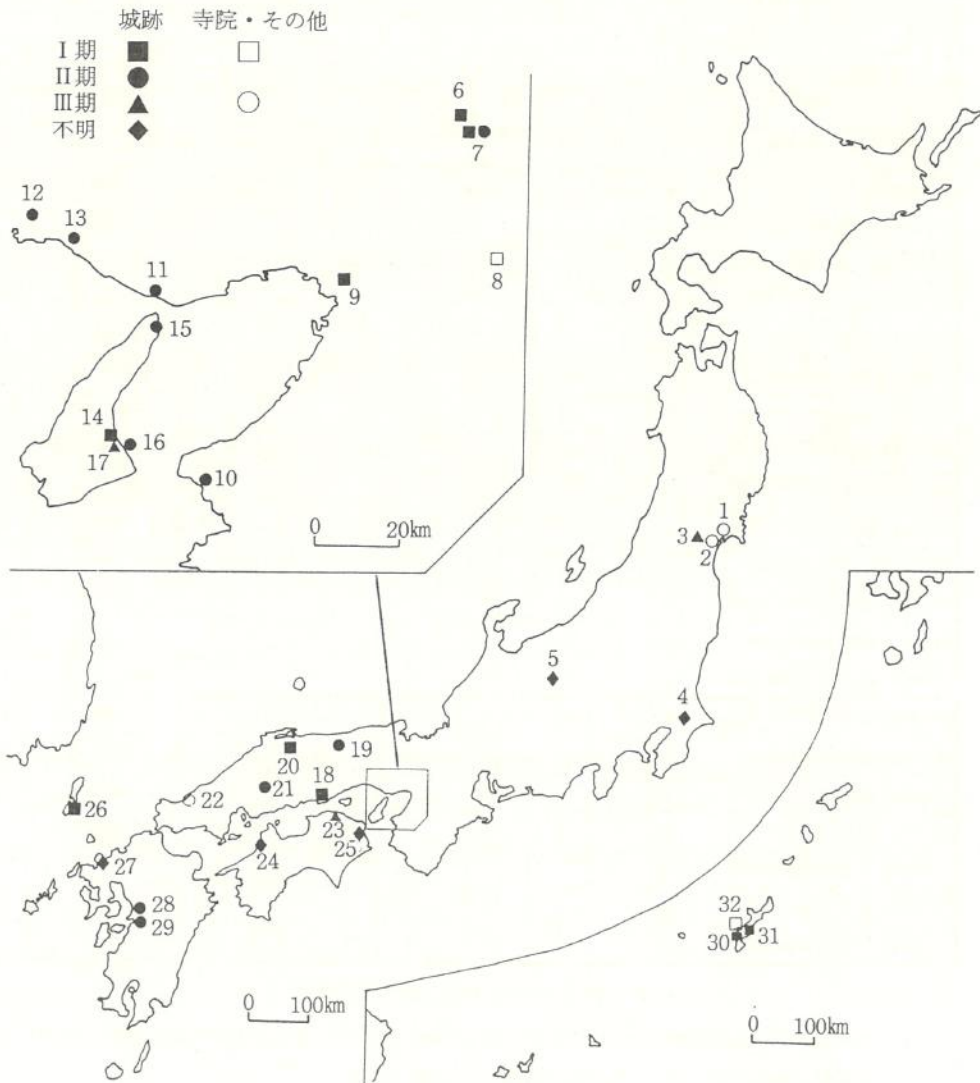
(5) 滴水瓦

近年、豊期城郭の特徴を示す瓦として滴水瓦があることが指摘されている。滴水瓦の使用に付いては1941年にすでに関野貞氏によって聚楽第が最初であることが述べられている³¹⁾。

これに対し、高麗瓦、滴水瓦の製作技法とその伝播に着目した渡辺誠氏は出土する20遺跡を四群に分類し第一群を李朝より伝わった可能性の高い対馬の金石城と富田城とし、第二群を文禄慶長の役以前とされる聚楽第、第三群を文禄・慶長の役を直接・間接の契機としてもたらされたものとして熊本城、姫路城、郡山城、鹿野城、第四群を第三群の影響下に出現した明石城、岩屋城、由良城とした³²⁾。

これに反し、中井氏はここで出土した瓦を詳細に検討した結果、瓦をI類=朝鮮半島で製作された金石城タイプのもの、II類(a類=姫路城タイプ、b類=由良城タイプ、c類=鹿野城タイプ)、III類(a類=大坂城タイプ、b類、c類=瑞巖寺タイプ、d類=高松城タイプ)の7タイプに分類され、おのおのI期を慶長期以前(I類、III-a類、III-b

類)、II期を慶長期、III期を慶長期以降(II-a類、II-b類、III-c類、III-d類)とした。さらに、池田氏系城郭以外から出土する滴水瓦を出土した城郭の城主はI期の金石城も含めて全て文禄・慶長の役に参戦渡海していることを指摘し、池田輝政は参戦していないが、弟の池田長吉が舟奉行に参戦している事に着目して、日本列島への滴水瓦の導入は文禄・慶長の役に参戦渡海した大名によってもたらされたと結論づけた。また、瓦当紋様の日本的オリジナル性から琉球品との違いも指摘している。



第4図 滴水瓦出土地分布図(註1d)

番号	遺跡名	所在地	種別	型式								時期		接合角度 鈍角 直	共伴する軒丸瓦	文禄～慶長 年間の城主	文禄・慶長の 役参戦		
				I	II			III				I	II					III	不明
					a	b	c	a	b	c	d								
1	瑞巖寺	宮城県宮城郡松島町	寺														—	—	
2	大沢窯跡	宮城県宮城郡利付町	窯														—	—	
3	仙台城跡	宮城県仙台市	城														(伊達政宗)	(○)	
4	土浦城跡	茨城県土浦市	城														結城秀康	(○)	
5	松本城跡	長野県松本市	城														石川数正・康長	○	
6	聚楽第跡	京都府京都市	城														(豊臣秀吉・秀次)	○	
7	伏見城跡	京都府京都市	城														(豊臣秀吉)徳川氏	(○)(△)	
8	岡崎	京都府相楽郡加茂町	不明	○													—	—	
9	大坂城跡	大阪府大阪市	城														(豊臣秀吉)	(○)	
10	和歌山城跡	和歌山県和歌山市	城														浅野幸長	○	
11	明石城跡	兵庫県明石市	城														(池田輝政)	(×)	
12	姫路城跡	兵庫県姫路市	城														池田輝政	×	
13	高砂城跡	兵庫県高砂市	城														池田輝政	×	
14	洲本城跡	兵庫県洲本市	城														(脇坂安治)	(○)	
15	岩屋城跡	兵庫県津名郡淡路町	城														池田忠雄	×	
16	由良城跡	兵庫県洲本市	城														池田忠雄	×	
17	由良藩邸跡	兵庫県洲本市	城														(蜂須賀家政)	(○)	
18	岡山城跡	岡山県岡山市	城														(宇喜多秀家)	(○)	
19	鹿野城跡	鳥取県気高郡鹿野町	城														亀井慈矩・政矩	○	
20	富田城跡	島根県能義郡広瀬町	城														吉川広家	○	
21	郡山城跡	広島県高田郡吉田町	城														(毛利輝元)	(○)	
22	常念寺	山口県萩市	寺														—	—	
23	高松城跡	香川県高松市	城														(生駒親正)	(○)	
24	松山城跡	愛媛県松山市	城														加藤嘉明	○	
25	徳島城跡	徳島県徳島市	城														蜂須賀家政	○	
26	金石城跡	長崎県下県郡巖原町	城														(宗義智)	(○)	
27	唐津城跡	佐賀県唐津市	城														寺沢広高	○	
28	熊本城跡	熊本県熊本市	城														加藤清正	○	
29	宇土城跡	熊本県宇土市	城														加藤清正	○	
30	首里城跡	沖縄県那覇市	城														—	—	
31	浦添城跡	沖縄県浦添市	城														—	—	
32	湧田窯跡	沖縄県那覇市	窯														—	—	

第3表 出土滴水瓦一覧表(註1d)

註 ※文禄～慶長年間の城主で()としたものは、出土した滴水瓦と時代的に整合しないもの。

※文禄・慶長の役に△としたものは渡海していないもの。

※共伴する軒丸瓦とは、接合角度が鈍角なもの。

IV. 城郭の瓦から町屋の瓦へ（近世期）

さて、信長の手により城郭に導入された瓦は、織豊系城郭の瓦として独自の発展経路をたどり、秀吉の全国統一のための築城政策に利用された。これらを支えたのは、信長が技術集団として寺院から摂取した「奈良衆」と呼ばれる南都の諸寺院の瓦を製作していた集団であった。彼らは根来や四天王寺、英賀、三木などにも工人を輩出しているほどの大きな技術をもった集団であった。その多くは、「橘」や「藤原朝臣」を名乗る世襲で行われていたようである。これらの瓦工人が寺院から離れ、天正4年頃から慶長5年ころまで織豊政権と密着していたであろうことは、その時期の紀年銘の瓦が城郭以外ではほぼ認められない事でも証明できる。また、彼らの手による瓦が寺院に戻るのは豊臣家の社寺勧進がひとつの契機に成っているものと考えられる。寺院から派生した城郭瓦の紋様は逆に寺院へ持ちこまれることになる。ここに瓦からみた戦国期はおわりを告げる。先に述べたとおりこれは、徳川時代が瓦のような物質を媒体にしなくともシステムとして築城政策を管理していけるだけのものが出来上がった結果であると考えられる。やがて、瓦生産は近世城下町の城や寺の度重なる普請や改修にともない、城下町毎に生産が定着していくものと考えられる。そして、最終的には庶民の手にも。

これら、戦国時代から近世への瓦生産の動きを研究するものにいくつかのものがある。これらの研究の最も重要な点は地方性であると考えられる。したがって、全国規模での動向をここで取り上げる事は不可能であるので以下のような要点に絞った。

(1) 赤瓦（塗布瓦、陶器瓦、塗瓦）

まず、赤瓦であるが、これについては久保氏が、広義に「意図的に赤く焼き上げられた」瓦を赤瓦とし安土城のものをあげられ、最終的に17世紀頃に成立した越前や盛岡城に見られる「土塗り」技法や酸化鉄を塗布したものを狭義の「赤瓦」として取り上げられた。地域によってはこれらを「塗布瓦」「塗瓦」「陶器瓦」などと呼ぶ場合があるが、織豊期と同じように「赤瓦」という名称で研究が進められている³³⁾。近年、名古屋城や岡山城などでは瀬戸系の塗瓦も発見されている。従来からこのような瓦は凍害に強い瓦として考案されたと考えられているが、各地によって成立事情が違うようである。これらの瓦生産は近世を示すひとつの例であると考えられる。

(2) 棧瓦

棧瓦の成立についても、同じく久保氏が「近世瓦生産の開始と屋根瓦の普及」として赤瓦の系譜と同時に検討されている¹⁸⁾。また、加藤氏もその後の近世城郭の瓦から静岡での棧瓦の成立時期を検討されている²⁰⁾。いずれも、研究の方法と指針を示すもので、今後のこ

の地域での成立時期の検討と比較が、近世の始まりを透明にしていくものと考えられるまたひとつの例である。

(3) 地方窯の出現

地方窯の出現の様相については各地で研究がなされているものと考えられるが、建造物の近江の例をとるならば、建造物の解体報告の紀年銘等の資料を再編した報告がある³⁵⁾。それによれば、天正期以前と慶長初期は、南都や京都栗田口の工人が関与している寺院が認められるが、それ以外は安土城での瓦生産という早い段階での特異な瓦生産があったにも関わらず、瓦生産は定着しなかったことがわかる。これらも先に述べたとおり、織豊政権下による工人集団の扱いによる結果と判断できる。

したがって、近江独自で瓦生産が始まるのは、最も早い膳所城下の天津松本の例で、17世紀後半、八幡瓦や長浜瓦では18世紀以降の生産のものしか確認されていないことがわかり、地方窯の出現時期が限定される。しかし、これらの生産の初源形態や理由はまだ明確にはなっていない段階である。今後の研究の大きな課題となるであろう。

また、地方窯の近世瓦研究として興味を引くものに、北村圭弘氏による、ひとつの紀年銘の瓦とその紋様から地域の様相を浮かび上がらせようとする「波兎紋様と作人平流重治郎³⁶⁾」や小宮猛幸氏による郡内という特定地域に存在する寺院の紀年銘鬼瓦から近世の瓦工人集団の関わりを考古学的に解明しようとする「旧栗太郎の在地瓦師に関する基礎的考察³⁷⁾」が上げられる。これらの研究方法は中世瓦や近世瓦との接点を研究する上では参考になるものと考えられる。いずれにしても、この分野の研究もこれからである。

V. 中近世瓦研究の今後の課題

以上のように、戦国期の瓦の研究は城郭研究を中心として飛躍的に進歩してきた事がわかる。しかし、これらの研究はさらなる命題を生み出してもいる。それらの内、幾つかは金箔瓦や桐紋・菊紋瓦、滴水瓦という形で答がだされつつある。しかし、①「地域での織豊期城郭の詳細な個別事例検討」はまだまだ研究の余地が残されている。この中には、②「織豊系城郭以外の瓦の導入」と③「織豊系城郭瓦の個々の型式からみた変遷と工人との関わり」という二つの大きな問題を内包している。これらは究極的に④「各地域、各工人の技術的系譜の検証」をおこなうことになり、ひいては「中世寺院瓦の生産形態と戦国期城郭瓦生産形態、近世瓦生産形態の違い」を明らかにする事になる。

また、これらには現在必ず政治的な動きが関わっていると考えられており、特に⑤「秀吉分国政策と築城に関わる瓦の生産の検討」は地域毎に検証がおこなわれる必要があると考える。中世的要素から近世的要素の抽出については⑥「豊臣家の寺社勧進と瓦生産」、

⑦「徳川家における瓦の扱い」や⑧「近世的要素の検討と地方窯、地方工人の系譜とその展開」の問題が深く関わっているものと考えられる。

以上、これら8つの課題が中近世瓦研究の課題として今後の論点となっていくものと考えられる。

V. おわりに

このように織豊系紋様瓦、金箔瓦、桐紋・菊紋瓦、滴水瓦を始めとする中近世の瓦は、まったく同じ歴史の土俵にのった。

いまや瓦による織豊期城郭の研究は信長、秀吉の築城政策や政治的背景そのものを色濃く反映した遺物である事が示されていることが実証されつつある。

屋根瓦は単なる雨露をしのぐ瓦ではなくなった。

残された中近世の瓦という遺物はお荷物なやっかいものから、もの言わぬ証人として歴史を語りはじめようとしている。そして、語らせるのは私たちである。

最後になりましたが、いつもたくさんの方々に教えて頂いているここに登場するたくさんの方々の友人でもある研究者の方々に感謝をし、さらなる、鋭い追及が研究を前にむかって進める事を願ってこれまでの研究成果の整理とこれからの課題としてまとめた本稿がひとつの通過点として認識されれば幸いです。もし、勉強不足のため力至らぬところがありましたらお許しください。

（滋賀県安土城郭調査研究所）

註

- 1) 中井 均 a 「織豊期系城郭の画期—礎石建物・瓦・石垣—」『中世城郭研究論集』新人物往来社 1990
b 「織豊期城郭の特質について—石垣・瓦・礎石建物—」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会 1994
c 「淡路岩屋城跡採集の滴水瓦」『歴史懇談』第七号 1993
d 「滴水瓦に関する一考察—なぜ城郭建築に葺かれたか—」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会 1994
- 2) 奈良国立文化財研究所『平城宮出土軒瓦型式一覧』 1978
『平城宮出土軒瓦型式一覧<補遺篇>』 1984
- 3) 佐原 眞 「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』58巻第2号 1972
- 4) 山崎信二 a 「平城宮・京と同範の軒瓦および平城宮式軒瓦に関する基礎的考察」『1993年

- 度文部省科学研究費一般研究C』 1994
- b 「大和における平安時代の瓦生産」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所学報
38 1980
- 5) 上原真人 a 「平安後期の軒瓦に関する基礎的研究」『考古学論考—小林行雄博士古希記念
論集』 1982
- b 「古代末期における瓦生産体制の変革」『古代研究13・14』(財)元興寺文化財研
究所 1978
- 6) 丹治康明 「東播磨における瓦生産—神出・魚住窯を中心に」『中近世土器の基礎研究』
III 1978
- 7) 天沼俊一 「法隆寺に於ける室町時代の銘瓦」『考古学雑誌』7—7 1917
- 8) 黒田昇義 「大和西ノ京の瓦工橋氏」『大和志』11—12 1944
- 9) 梅原末治 「初代橋吉重所作瓦の新例氏」『史跡と美術』161 1944
- 10) 高橋美久二 「東福寺の創建と大仏様建築」『古瓦図考』 1986
- 11) 今里幾次 『小野市・長尾寺跡の出土瓦』 1988
- 12) 佐川正敏 『法隆寺の至宝』第15巻 小学館 1992
- 13) 藤沢典彦 『中・近世瓦の研究—元興寺編—』元興寺文化財研究所 1982
- 14) 市本芳三 「摂河泉における古代末・中世瓦の様相」『研究紀要vol. 1』(財)大坂文化財セ
ンター 1993
- 15) 田中幸夫 a 「大和から三木へ来た橋氏と古瓦」『三木史談』第21号 三木郷土史の会
1989
- b 「播磨で活躍した室町・桃山時代の瓦工集団」『播磨考古学論叢』今里幾次
古希記念刊行会 1990
- c 「中世から近世にかけての京都近隣の瓦」『京都考古』第70号 京都考古刊行
会 1993
- d 「姫路城瓦と姫路系瓦工人」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会 1994
- e 「播磨を通過した四天王寺系瓦工人」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会
1995
- 16) 木戸雅寿 a 「安土城出土瓦と南都系寺院の瓦の紋様について」『研究紀要第3号』滋賀県
安土城郭調査研究所 1995
- b 「安土城出土の瓦について—その系譜と織豊政権における築城政策の一端—」
『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会 1994
- c 「織豊期城郭にみられる桐紋瓦・菊紋瓦について」『織豊城郭』第2号 織豊
期城郭研究会 1995

- 17) 森田克行 『摂津高槻城本丸跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会 1984
- 18) 久保智康 a 「越前における近世瓦生産の開始について—武生市小丸城跡出土瓦の検討—」
『福井県立博物館紀要』第3号 福井県立博物館 1989
b 「近世後期南加賀における赤瓦の生産」『福井考古学会会誌』第10号 1992
c 「近世赤瓦の技術系譜—「石州瓦」の位置づけをめぐる—」『八雲立つ風土記の丘』No124 1994
- 19) 土山公仁 a 「岐阜城の瓦について I」『岐阜市歴史博物館研究紀要第3号』1989
b 「信長系城郭における瓦の採用についての子察—同範あるいは同型瓦を中心て—」
『岐阜市歴史博物館研究紀要第4号』 1990
- 20) 加藤理文 a 「東海地方における織豊系城郭の屋根瓦」『久野城Ⅳ』 袋井市教育委員会
1993
b 「豊臣政権下の城郭瓦—中部地方を中心に—」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会 1994
c 「金箔瓦から見た信長・秀吉の城郭政策」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会 1995
d 「静岡県における家紋瓦の成立」『静岡県考古学研究25』 1993
- 21) 第1回研究集会「織豊期城郭の瓦」（滋賀県安土町）、第2回研究集会「同範・同紋・同系—織豊期城郭瓦工人の系譜を探る—」（静岡県静岡市）
- 22) 織豊期城郭研究会『織豊期城郭資料集Ⅰ 織豊期城郭の瓦』 1994
- 23) 森島康雄 a 「聚楽第跡出土の軒平瓦」『京都府埋蔵文化財情報第49号』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1993
b 「聚楽第と城下町の瓦」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会 1994
- 24) 黒田慶一 a 「豊臣氏大坂城の瓦について」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会 1994
b 「豊臣時代の桐紋瓦について」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会 1995
- 25) 中村博司 a 「金箔瓦試論」『大阪城天守閣紀要』6 1978
b 「金箔瓦試論—補遺—」『大阪城天守閣紀要』8 1981
c 「金箔瓦論考」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会 1995
- 26) 『史跡若松城』会津若松市教育委員会 1995
- 27) 倉澤正幸 「信濃における織豊期の城郭所用瓦の考察」『信濃46』 1994
- 28) 『県指定史跡甲府城跡Ⅰ』山梨県教育委員会 1991
- 29) 「岡山城本丸Ⅲ次発掘調査現地説明会資料」岡山市教育委員会 1995
- 30) 高田 徹 「犬山城の瓦について—特に桐紋瓦を中心として—」
- 31) 関野 貞 『日本の建築と芸術』上巻 岩波書店 1941

- 32) 渡辺 誠 a 「高麗瓦の製作技法について」『名古屋大学文学部研究論集』101 1988
b 「滴水瓦の製作技法について」『名古屋大学文学部研究論集』107 1990
c 「日本・琉球への近世書記の滴水瓦の伝播」『大川清博士古希記念論文集 王朝の考古学』雄山閣 1995
- 33) 山本宏治 「駿府城出土赤瓦」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会 1994
- 34) 八木光則 「盛岡域における初期燻瓦」『織豊城郭』創刊号 織豊期城郭研究会 1994
- 35) 菅原和之 「瓦銘に見る滋賀県の近世瓦生産地について」『滋賀県指定本願寺八幡別院表門・鐘楼保存修理報告書』滋賀県教育委員会 1993
- 36) 北村圭弘 「波兔紋様と作人平流重治郎」『滋賀考古第14号』1995 滋賀考古学研究会
- 37) 小宮猛幸 「旧栗太郡の在地瓦師に関する基礎的考察(前編・後編)」『滋賀文化財だより』No213・214 1995 滋賀県文化財保護協会